

一
休

水上勉

一

休

水上
勉

中央公論社

一 休

檢印
磨止
©一九七五

昭和五十年四月二十日 初版

昭和五十二年六月三十日二十一版

著者 水上 勉

発行者 高梨 茂

印刷所 三陽 社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一

電話(五六)五九二一

振替東京二一三四

一

休

ここでいう一休とは、室町末期の乱世を生きた禪僧一休宗純和尚をいう。この人に関心をよせる理由は、時代と生涯のかかわりにある。人は世を生きる以上、その時勢の風をさけることはできない。山中独居の禪僧が、面壁数年、只管打坐に徹しても、かすみを食って生きられるはずはない。耕さずして食うなら、百姓町人のいづれかから米、粟、野菜を恵与されての命であつたろう。だとしたら、天災飢饉の秋はどうしてしのいだか。百姓町人の塗炭苦は切実で、血汗ながしての僅かの収穫も、地主、武士に絞りとられ、うす粥をすすつての越冬だったと史家はいう。その戸をたたいて、旅の僧ゆえ一鉢の米をめぐんでくされと懇願し、いくばくかの米、粟を買ったか。それとも、まだこの当時は、多少の権力も維持できた朝廷、幕府に願い出、寺領としての田畑も温存させ得た時期だから、武士と同じくあがり米を貯え、飢饉時にも悠々閑、随所作主の生活であつたか。そこらあたりのところがわからない。得てして禅派の高僧伝は、護教派のあら

わすものが多くて、かの百丈懷海が、「一日作なさざれば一日食らわす」と、清規しんぎにも述べ、僧生活のありようを示したにもかかわらず、一日何もせず坐りつめの見性生活では矛盾をはらむのである。室町末期は誰もがいう如く、旧来の權威者、宮廷、公卿、幕府に力が失せ、都は管領の権力争いとなり、地方では地侍や豪族が跋扈し、一方、町人百姓も目ざめて苛酷な貢租をのがれようと一揆をおこした。禁裡を守護する大名の部下が、徳政一揆にまじって強盜放火を働き、いまして思えば、見廻り中の警官が強盜に早変りするけしきである。そのような日々ならば、真面目に働き商いする者も少なく、強者は弱者を殺し、弱者は集団で強者を圧し、強盜、放火、強姦、追いはぎはいうに及ばない。物盜りできぬ老人、女子供はただおろおろかけ廻り、疫病でうめく者は、野たれ死直前の姿で、都大路や賀茂河原にあふれた。このような時代に、上求菩提、下化衆生をたてまえとする仏徒が、飢え死もせず、ひたすら見性こそ成仏道なりとし、自心のみを直視する立場から、いったい、見ぬわけにもゆかなかった百姓の歎きに、どのような思量で接し、教化を試みていたかは興味のあるところである。

いまここで臨済宗派の中世史をみると、一休が生誕した応永元年（明德五年）は、官寺五山の権力は頑固に保持せられ、幕府がきめた僧録司の命ずる住職が、一派の總統となり、僧は大伽藍というべき山内（市井にあっても山とよんだ）に安居し、あるいは文芸にいそしみ、あるいは茶道にあそび、あるいは豪商、武家に公案禪の早わかりを説いて道場禪を守り、すなわち教団禪を「正宗」としていたけはいで、一休はこの教団に住むことをきらい、八十八歳の生涯をほとんど

市中または地方でござし、百姓町人に接してくらしたといわれる。末法の此岸に絶望する民に、ひたすら念仏あれと他力本願を説いた真宗も、この期の新興宗教だが、一休はこれにも批判を下し、自らは自力の本領を以て飢餓民の接化に没頭している。そのところも、魅ひかれるし、またどのような接化をなし、後の効果があり得たか、そのあたりに興味はつのる。たとえていえば、彼は「極樂は皆身みなみにあるわけだから、西ばかり拜んでは浄土へゆけるはずはない」などと道歌をよんだり、無常迅速、生者必滅の理を説く法語にも、「いにしへは道心をおこす人は寺へ入りしが、今はみな寺をいづるなり。見ればぼうずにちしきもなく、坐禅をものうく思ひ、工夫をなさずして、道具をたしなみ、坐敷をかざり、我慢多くして、ただころもをきたるを名聞にして、ころもはきたるとも、ただとりかへたる在家なるべし」(『骸骨』)といっている。道具とは、おそらく茶器の類であり、座敷をかざるとは袈裟、掛軸をおごり並べたにちがいない五山の生活を指したとみてよい。教団のよごれをいいつつ、「今」ということを重視している。その「今」は、すなわち地獄の世相であって、「今」を生きたるためには、今の教団からとび出て、あるいは他人からみれば禅僧らしくない破戒もなさねばならぬ、僧とて女犯、肉食、酒肆淫坊の出入りは思うままだと、己が意のままに、風狂三昧だったといわれる。このこともまた興味がつのる。加えていえば、そんな生活にあけくれつつも、己れは不立文字の禅境を説くに、いくたの文をなした。たとえば、『狂雲集』『自戒集』などは、平仄も定かならざる詩文であるが、「私小説」ともよべる自己告白編もあって、述志、独白、さらに女性にあたえた仮名法語は、わかりにくい禅境をわ

かりやすく説き、さらに数多くの道歌で、地獄を生きる勇猛心をもつたえた。七言や三十一文字に卓抜な詞藻をちりばめる才能は、五山文学でも見られぬ傑出した文芸だと史家は讃嘆する。この詩文の一端によると、老年にいたって彼は、森なる盲女が、かねてから師と仰いで隨身を望んでいたのがわかると、側におき、一日、堰をこえ、同棲をつづけることになる。青壮年期は巷の辻女を漁っていたが、七十八になって衰えざる性欲を盲女にかたむけるのである。その証拠に、『美人の陰に水仙花の香あり』とうたい、八十八歳まで賞玩して、永劫の来世まで汝と契りを結びたいとの詩篇をのこしている。いくら乱世の生きざまとはいえ、盲女の肌に顔をうずめる八十八老僧の、しわくちや顔を想像していると、「今」の私も、これは尋常ならぬけしきとみる。まさかと思つたものだが、しかし当人が述懐しているのであるから信じぬわけにもゆかない。地獄をなめ歩くような告白も、この時代ならこそと思ひあらためるが、じつは学者によつては信じられぬとする人もいくらあつて、とりわけて教団内の学者には、一休伝は書かれはするものの、淫坊云々は簡記するにとどめて、ふかく心理を詮索してみようとしなない。私には黒衣の僧が盲女を淫するときけば、薄幸にも闇を生きる女の心懷はしめるものと思われる。述懐をきくまでもなく、手をさしのべる男はたれであろうと、憂き世の仏にちがいあるまい。が、盲女は相手の顔を見ることもできない瞎驢である。一休は、弱い立場の女心の深部まで降りてこれをおもんばかりの文章は書かなかつた。たとえば、遍照の「世をそむく苔の衣はただ一重、貸さねばうとしいさふたり寝む」に似ており、凍えた辻女にも相手をえらぶ自由はあるのである。衣を着せてやれ

ばそれでぬくものというものでもない。女ごころの微妙はあくまで無明であって、それをかかえる配慮に欠けていた。とはいえ、一方的恣意で女犯をなしたにしろ、なしたといわれればそれを信じるしかないものを、学者は一休の創作であって、自己の禅思想を述べるため、絵空事を持ち来たたと断ずる。なるほど「今」を生きる作家にあっても、己れの行実を、ありのまま記録にとどめることは至難で、簡略な日録にさえ嘘をまじえてとりすますわれわれを嚙みしめれば肯えよう。「一休は清僧にして文芸の人なり」というのも、じつはこのあたりの消息であらうか。いずれにしても、われわれは当人が逝いて五百年後に、いまその行実を想像してみるのである。いずれの個性にしたがつて見解を述べるのも現在人の自由だ。まこといま、一休を見た人はいない。「一休伝記」といわれるものは数多くある。中には五百年の歴史を失せずして珍重されてきたものもある。その最たるものは、弟子墨斎こと没倫紹等の作といわれる『東海一休和尚年譜』『一休和尚行実』である。一休没後間もなく書かれたものの由で、『続群書類従』第九輯下伝部第二百四十二と『大日本史料』(第八編之十三) 文明十三年十一月二十一日の項でみることが出来る。史家はこの『年譜』から一休の生涯を追跡し、空想し、その実像を、それぞれの眼で示すのである。だが、弟子の書いた『年譜』であるために、いくらか神格化されたにちがいないとし、行実細部の真偽を問う人はいる。たとえば、『年譜』が冒頭で示す生誕のあたりで、後小松帝の落胤説は、一休もしくは伝記作者の創作で、嘘だという。紹偵実子説の否定もその例である。いずれを根拠としてこれを否定するも自由である。しかし、困ったことに、父の名も、母の名も疑われ、その

子さえ実子でないと疑われれば、「真伝」は不可能といわねばなるまい。

ここでさかしらごとをはさませてもらえば、その行実に、彼が女犯をなしたことが明々なれば、いまのように、精管結紮の手術をなしたことは九分どおりあり得ないから、交渉があれば懐妊の可能は常識とみてよい。女犯あって、子はなさぬものと誰がきめたか。実子否定説の空論であることは立証される。「今」をみるに、持戒堅固の老僧が入籍もせぬ女性と子をなしている姿はどこでもみられる。人はそうかわるものではない。一休自身が、盲目の森女を愛し、淫坊に女を買ったと告白する以上は、どこかに子をうみ落したと考えられてよい。紹偵実子否定説には、かなりの根拠もある様子だが、墓も現存するのに、文芸上の創作だといってすむことではないであろう。ふかく詮索すれば、紹偵のほかに、まだ子はいたとみても暴論でないかもしれない。また不思議なことは一つあって、老年にいたっての盲女との淫事は微細に表現する一休も、子の始末については毛ほども書きのこしていないのである。紹偵実子説は、その時がきてまったくわしくふれてみたいが、生れた子が紹偵であったかどうか、ということは私にとって重大なことではない。子があったといえ、それで話はつまる。

女犯をなし、盲女を賞でた一休は、禅僧らしからぬどころか、私にはなおさら親しみがもてる。人間は都合よきことはあるまじきことでもあったふうに書くし、反対に都合わるければ、あったことでもなきがごとくに書くのは、古今を問わぬ。一休も「伝」を書く人も人間であったと私は思う。むしろ山中独居で、面壁八年とつたえられた達磨大師をつぐ、唐代、宋代の祖師たち、日

本に伝来されてこの方、法を承けて名をなした祖師たちに、「正宗」護持を宣言した持戒堅固者が多いが、その風格から人間は嗅ぎだせなくて、破戒一休にこそ感じられる。不思議である。学者はこの一休を異端の禪者という。われわれは一休の異端を如何ほど理解しないながら、一休がいて、我流の禪へ参入できる感懷を偽われぬし、一休の接化姿もまたどこやら馴染みぶかいのはどういうわけか。「夢窓さん」「大応さん」とはいい難く近づき難いが、「一休さん」は百姓子供にもつい口をついて出るのである。禪僧の行実が庶民に生きた証といわねばならない。

『年譜』を尊重しなければならないことは私も当然である。『狂雲集』『自戒集』その他著述に注目しなければならぬことも言を俟たない。それにしても『年譜』は、八十八年の生涯を述べるに簡記すぎる。それに漢文なので、大げさなもの言いも感じられぬではない。その上、難解なので、全生涯の具体を商量することは殆ど困難であろう。それであるにもかかわらず、書きすくめてみたかったのは、私自身同派の一寺に出家し、沙弥をつとめた経験があることと、いまはその宗派を出て還俗している事情から、多少の禪寺での幼年、少年時を思いだして、一休の人となり、とりわけて幼少年期の寺院生活に興味をもったからである。理解不可能ながら、知りたいとするわが心の、格別のものというのはそれしかないものであって、このことは、たとえば、『一休諸國物語』の作者が、「竊に愚かなるころのそこにおもひそめて、筆のはしるにまかせて玉淵をうかがふ事なれば、却而世のそしりをもかへり見ず、ただうき世の波にただよふ一瓢のうきにうかびたる世の中の、人のところはよしあしの難波入江のもしほ草、かきあつむるといへどもみじか

きをひきのはし、其心ざしはかりがありがほなり」といい、「世上に、同名はなしの書、其類ありといへとも是もつて実義ならず、幸なるかな此書、らくぐわいにさる翁のもとに一休一代記あり、数年の懇望によりてもとめ得たり。彼はつづり、梓にちりばめ」てみせた事情と似ている。正直に、「伝」の困難なることをみとめている。かくいう私も、この著者にならって洛内書肆で求め得た『一休和尚行実譜』なる珍重本をもつことを告白する。大正二年癸丑の刊で、和綴じと紙刷りの仮名まじり文である。著者は、風狂子こと磯上清太夫とあり、明治中期に生れている。序文によると、これには原本があつて、京都竹屋町の儒家に出入りしたらしい某の著で、元禄二年の刊行物たつたらしい。原本の序文には、「われ相国寺塔頭玉龍庵にあり」とあるところから想像して、原著者はかつては僧籍に身をおいた人か、何かで五山塔頭にくらした経験の主であらう。いすれにしても、江戸中期の本を読みくだし本とした清太夫なる戯作者のいたことは寡聞にして知らぬし、文学史にも登場してこない。だが、一休行実については、この書ほど詳記している本をまた他に知らないのである。もつとも、私はいま手許に、高嶋米峰『一休和尚伝』、市川白弦『一休、村田太平』人間一休、古田紹欽『一休』、松本浩記『一休の生涯』その他、『高僧伝』『仏教史』『禅宗史』などに著わされた一休伝といえるものをあわせて二十数冊所持しているが、これらの書物もみな、紹等の『年譜』を基としていることはいうまでもない。元禄の某もまたその例にもれぬが、某は独自の空想力で、一休像の肉感をただよわせて迫るのである。氏はいう。「ひそかにうらみとするは、年譜の簡記せることなり。紹等が師によくつかへ、晩年大和十津川

にあそび、師の臨終にたちあひたるにかかはらず、おのが得意とする彫りもの、画筆に興をかさね、師のおもかげを後世にのこさんとせる業は多とするも、たとへば臨終のみぎは師の生体より髭をぬきとりて木像にうゑつけるがていの気概あらば、いかでか伝にいま数行の詳細をなさざりしか、くちをしきことなり」

とある。一等の弟子のなした伝記にしては「真姿」が迫つてこぬと恨むのである。私ももとより同感であつて、そのために、たとえば、幼少期に村芝居でみた、白ぬり役者の扮する青頭の一休が、あいかわらず登場してきて困る。この一休は幼名を千菊丸といい、したがえて出てくる女は、黒んぼと思われるほど面を炭でまぶし、ボテかずらをかぶつた老女であつた。一休幼少の頃、乳母としてつかえた高橋三位満実卿の妹で玉江の局という。玉江の局は折から、千菊丸が母なる人、日野中納言の息女照子姫の棲家から御所に向つて都大路にさしかかるのであるが、舞台は雪が降っている。千菊丸は花道をすぎて舞台中央にくると、雪をつかんでたわむれる。「若さま、そのようにおいたをなさつてはいけませぬ、ころびますぞよ」と乳母がたしなめる。と、千菊丸は、青頭を心もちのけぞらせ、高慢ちきに鼻の穴を空へむけ、「乳母よ、何をいう」とくつてかかる。乳母はいう。「帝のお子たるもの、そのようなはしたなき雪を掴んではなりません。ごろうじませ。うつくしき紅のいろなる梅が咲いております。もう春でござりまする、若さま」といったあと、やや面をかえて、「うつくしき紅のいろなる梅の花、あこが顔にもつけたくぞ思う」と詠んできかせるのである。すると、したりげにきいていた青頭の千菊丸が、「そのような歌なら麻

呂も詠んでみせようぞ。降る雪がおしろいならば手にとりて、黒クロの顔にぞぬりたくぞ思う。どうじゃ」黒んぼの乳母はのけぞって笑うのだ。そこで幕がおりる。何んともいえぬこましくれた小僧めが、と見たのは私の幼少時の見解であつて、誰から教えられたものでもなかった。つまりそういうふうに一休は私のなかに入つてきており、今もちょこさいな少年僧として生きているのであつた。やはり紹等がのこした『年譜』からではなくて、巷間つたわつた戯れ本からのことをわれわれは信じてきたことを否認しない。某にも清太夫にもその責はある。しかし、その責はただ輕侮されるだけのものではなくて、師匠を神格化し事実のみを披露したかにみせた瘦せた伝より、肥つてみえる一休像を現前させていることは確かであろう。私など、その一休を親しく思いつづけてきた。これも「うきにうかびたる世の中の波にただよふ人のよしなしごと」にしても、作者のもつ志が、一休の像とかさなっていたからのことにほかなるまい。己れの眼なくして人もけしきもみえてこぬ。そういうえば、青頭の千菊丸が、小鼻をふくらませて鼻の穴を空へむけた表情は、薪村酬恩庵に安置される一休像や、紹等が描いたとつたえられる京都真珠庵藏の一休画像の顔に似ていた。木像も画像もこれまた甚だしく似ておるのは当然としても、とりわけて酬恩庵戒壇の中央に端坐する一休像は、そこに、ありし日の和尚がすわっているけしきであつた。清太夫説によれば、弟子墨斎が生体の髭をひきぬいてうえつけたとつたえる口髭も、不思議になまなましく生きてみえた。五百年も、木にうえた微毛が、生きてみえるとは摩訶不思議なことだが、ぼさぼさといまも確かにみえ、イガ栗の頭が無精に一寸ばかりのび、八字の尻さがりになった太眉や、

たるんだ下瞼の肉の厚さ、ちょっと横眼でこつちをにらんだ異様な人相は、どうしてこれが帝の子かと疑われた。わが在所のあせ道ですれちがう父^とつあま顔にみえたのである。もつともこれも第一印象であつて、しばらくみつめてみると、「すね者でないとはいはないが、深くあたたかいものが奥にある。鋭敏な批評家だが、同時にまた虚空といふ源にいつもつながつてものをみてる恰好」であり、「単に価値の転換を説く哲学者ではなく、すいも甘いも心得て、しかも許さないといふ峻厳な道心である」とされる唐木順三氏の述懐のみこめるのであつた。清太夫氏もここを訪れて木像はみている様子で、「妖怪に見ゆ」と記している。血統がすぐ露見する帝の子ではなくて、得体のしれぬ人相という意味でもあろうか。私の場合、幼少時にみた村芝居の、あの青頭の小僧の、いやにこましゃくれて、師匠も、兄弟子も、代官さまも、小馬鹿にしてあしらつた、気味のわるい子供とかさなるのだ。おお、なんと華叟も養叟も、墨斎も、一休の前後でおろおろと生き、瘦せてみえたことだろう。清太夫氏はつづけて、

「和尚はまことに妖怪なり。不気味なり。いづれの世にも誕生地不明の人の生れたるをしらず、寡聞にしてしらず」

と述べている。前書きがなくなつてしまつたが、要するに「一休伝」は非才の私が渉獵し得るだけの書物を基として、清太夫本によつて加筆をこころみ、あわせて浅学の、一休を憶う心を披露してみるにすぎない。ついでながら一休を妖怪とみる学者は今日もかなりある。市川白弦氏は、一休の生誕を謎とし、妖怪だと言及されている。妖怪とみるなれば、世の化物譚と同様、それを

みてきた人以外に語れぬ。一休和尚がどのような米を、どのような方法で手に入れて食らい、どのような方法で酒肆淫坊に入る資金を取得し、どのような顔で辻女や遊女を口説き、盲女を抱いていたか、妖怪なればこそ清太夫氏の如く、具体の描写は可能となってくる。私もまた、この妖怪の尾っぽを、いいかえれば異端の禪師の足もとをみたいのである。

二

応永元年（明徳五年）は西暦一三九四年で、今からざっと五八〇年前になる。正月元旦に一休は生れた。『年譜』は、

「後小松皇帝応永元年甲戌。師は刹利種なり。其の母は藤氏。南朝簪纓の胤、後小松帝に事え能く箕箒を奉じ、帝の寵渥し焉。后宮藩して曰く、彼に南志有り、毎に劍を袖にして帝を伺うと。因って宮闈を出でて民家に入編し以て産む。師襁褓の中に処すといえども、龍鳳の姿有り。世に識者あるなし。正月朔、日出ずる時出胎」

と記している。母は南朝に縁ある藤原氏の娘、後小松帝につかえて愛寵を得ていたが、一日、后妃が帝に讒言した。藤原氏は毎日、小剣をふところにして帝の命をうかがっている、と。これが因で、宮廷を追われ民家に入った。この時、母は懷妊していて、正月元旦の日の出時刻に子をうんだ。子はむづきの中でみると、龍鳳のおもむきがあった。